柿生文化

平成２３年２月１８日
川崎市立柿生中学校内
柿生郷土史料館 情報・研究誌
第３２号

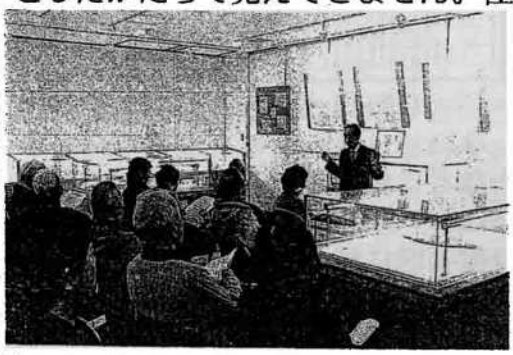
反響呼ぶ！「秀吉御禁制朱印状」公開

―― 中世、麻生の姿を解明 ――

現在、柿生郷土史料館で公開されている「豊臣秀吉御禁制朱印状」が麻生区及びその周辺の方々から大きな反響を呼んでいます。

今、郷土の歴史の真実が少しづつ掘り起こされようとしています。

川崎市全体の歴史については、中世（鎌倉～安土桃山時代）の姿があまりはっきりとしたかたちで見えてきません。江戸時代は、土地支配の関係や社会の様子が比較的はっきりしてきますが鎌倉、室町時代は、史料自体も少なく、支配関係がめまぐるしく変化するというなかで、なかなかはっきりとしたことが分からないというのが現状です。



（小島氏の「朱印状」にまつわる講演＝2月6日、展示会場にて）

そのような点からも、この「御禁制」は、中世の終わりから、近世の始まりにかけての過渡期にあたる貴重な史料となるものと考えられます。

２月６日・１３日・２０日の３日間の公開は単なる展示ではなく、この史料についての解説や所有者であり、この禁制を拝領した小島氏の直接の子孫である小島一也氏より史料にまつわる貴重なお話もあります。

この「禁制」は、ちょうど豊臣秀吉が全国統一事業の最終段階としての小田原北条氏との戦いの際に秀吉自身の軍勢に対して出されたものです。

この歴史的資料から分かってくる歴史的な謎を解き明かすヒントとして次のような視点があります。①この禁制は何のために出されたのか。②なぜ小島家のもとに出されたのか　③この当時、小島家はどのような立場であったのか　④この禁制の対象となった９か所（王禅寺村・古沢村・万福寺村・黒金之郷・石川之郷・三輪之郷・荏田之郷・片平之郷・大棚之郷）の「村」と「郷」の違いは何か。⑤「朱印」は何を意味するのか。

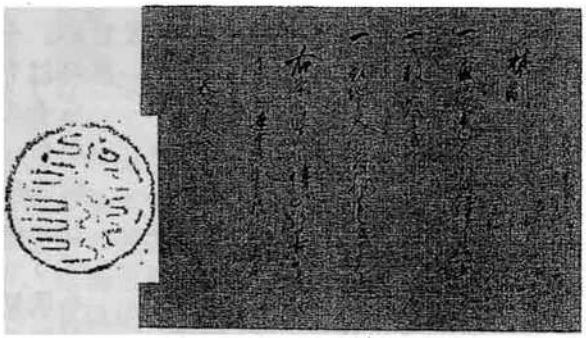
などいくつかの視点からこの当時の麻生周辺の姿を考えていきます。

「朱印状」の公開は、後１回だけとなりました。郷土の歩みを知るうえで重要な展示となりますので、是非ともご来館くださいますようご案内いたします。

展示公開（最終日）日・時

於：柿生郷土史料館（柿生中学校内）

- **２月２０日（最終日）　午前10時～午後3時**
- **ガイドセミナー　①午前11時より　②午後1時より**



（「秀吉御禁制朱印状」と朱印部分）

アヘン戦争と明治維新

幕末、隣国中国で起きた大事件を日本人はどうとらえていたのか

前号では、「坂本竜馬が知った海外情報」と題して、鎖国下の幕末の志士坂本竜馬がどのようにして海外情報をキャッチし、新しい日本建設への原動力としたのかということを「海国兵談」「海外新話」という２冊の書物から考えてみました。

今回は、幕末期、日本人にとって一番ショッキングな海外情報であった「アヘン戦争」を当時の日本人がどのようにとらえていたのかということを考えてみたいと思います。

（「海外新話」掲載のイギリス占領地域＝黒塗り部分）

幕末期、どうも海外情報は、色々な所から国内に漏れていたようです。極秘情報であった『オランダ風説書』『唐風説書』は昌平坂学問所（幕府直轄の学校）や老中水野忠邦の側近から漏れていたことは分かっています。

その一つとして、密かに編集されていた塩谷宕陰（しおのやとういん＝水野忠邦の側近）の『阿芙蓉彙文（あふよんいぶん＝アヘンの原産地トルコのアフヨンから付けた名称）』という書があります。

この書には、「清（中国のこと）は、自国の文化や力は高いと思い込み外国の状況を知るための努力をしない」「アヘンの害は昔から分かっていたことで、これを急に止めさせてアヘン商人などに厳罰を科しても人々が反発するだけで、林則徐（清の政治家、アヘン取締りの中心人物）の政策は外国人も中国人も納得しない」等と記述しており中国側の外交をかなり冷静に、かつ批判的に述べています。

また、斎藤竹堂（昌平坂学問所の所長）の『鴉片始末（あへんしまつ）』には「清は海外の諸国を犬・豚・猫・鼠や、また魂の無い物のように考えており、外国人の知恵を理解したり、他国について知らないことがたくさんあることに気が付かなかったりして、口を開けば未開人、野蛮人と言う。だからこのようなことになってしまった」とイギリスの不正を批判しながらも清の考え方や対応のまずさを論じています。

この二つの書は出版されることはありませんでしたが、写本という形で人々に伝えられていきました。そして、日本国内に少しずつ正確な海外の情報が伝わっていったものと思われます。　同時にこれらの二人の主張から考えますと欧米列強に対して、しっかりとした見通しを持ちながら外国に対応していかないと次は、日本も同じようになってしまうということが暗に述べられています。皮肉にもこれが倒幕運動にもつながっていったのではないでしょうか。

嘉永６年（1853年）ペリーが浦賀に入港した時の日本人のあわてぶりは、一般庶民よりも幕府の方であったのかもしれません。一般庶民には発禁処分にされた「海外新話」の写本や海賊版もありましたが、幕府はもっと詳しい海外の情報を得ていたのですからその緊張感は強かったものと思われます。ですから、日米修交通商条約を締結せざるをえない幕府の内心は穏やかではなかったと思います。かなり正確な海外情報をキャッチしている訳ですからペリーやハリスの要求を無視することの危険は重々承知しているわけです。井伊直弼の苦渋の決断が見えてきます。そして、十年後には明治となるわけです。　（参考資料：「日本海防史料叢書」「海外新話」「アヘン戦争と日本」）

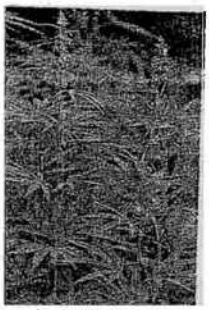
（「海外新話」掲載の「イギリス人に連れ去られる中国人女性」）

― 柿生・岡上地名考 ―　麻生
― 柿生・岡上鉄の系譜 Ⅸ ―

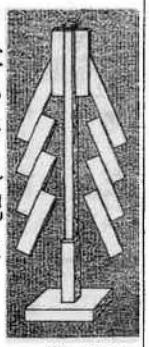
「麻」は古代人にとって何だったのか

本誌３０号には、「麻生」の地名と「鉄」との関わりについて関係のある地域を関東地域で見つけだしてみました。

今回は、この関係について更に考察を深めるために、古代では「麻」はどのような意味をもっていたのかについて考えてみたいと思います。


（「麻」）

昔は、日本中に「麻」が自生していました。日本の「麻」は毒性が低く麻酔作用はほとんどありません。ですから日本ではもっぱら麻を繊維の材料として使用してきました。　しかし完全に無毒であるわけではないので中には中毒を起こすこともありました。　昔から麻の繊維を取り出すための「麻打ち」を行なう時にはよく「麻酔い」と言う現象が起きました。これは酔った状態になるということでしょうか。「播磨国風土記」の記述には『二人の女性が麻打ちの作業を行なっていたところ次の日には死んでいた』という記述があったり、「古今要覧稿」には『〝狂笑〟（狂ったように笑うこと）が止まらない』とか「甲子夜話」（松浦静山著の幕末期の見聞記）には『初生りの麻の芽を食べると発狂する』等と書かれています。（ここに書いた「麻」は「苧麻ニちょまニからむし」ではなくクワ科の「麻」を指す）


（幣ニぬさ）

ところで神社の儀式でかならず登場するものが「麻」です。お正月に地元の初詣に行きますと神主さんが棒の先端に麻を結びつけた「幣（ぬさ）」を振って「お祓い」をしてくれますが、これがそうです。神社のお札には「大麻」と書かれたものもありますし神主さんの着る衣服も麻で作ります。したがって日本古来の神事関するものとしてこの「麻」がかならず登場するのです。まさに神聖なものとして考えられていました。日本では古くは神話時代から巫女（みこ）が神懸かりとなり色々なことを予言し判断をしたりしました。日本の古代シャーマニズム（霊能者が霊的な存在との交渉を行なう宗教様式）にとって「麻」が何らかの関わりをもったのではないかと考えられます。先程の「麻酔い」と麻の「幣（ぬさ）」を振りながら巫女が神懸かりになるなることと何か関係があるのではないかと気になって仕方がありません。

（参考資料「播磨国風土記」「民俗学事典」）

第２６回　柿生カルチャーセミナー開催（1／31）

古代橘樹郡の姿を知る

（講師の村田文夫先生）

１月３１日には日本考古学協会会員の村田文夫先生をお招きして「川崎たちばなの古代」と題して講演をいただきました。

律令国家の基本的なお話から、影向寺周辺の発掘、橘樹郡衙の発掘調査をもとに古代武蔵国橘樹郡の姿や、郡衙と影向寺、橘樹神社との関わりなどについて具体的にお話しされ、さらに都筑郡衙との関係にも触れられ、大変興味のあるお話をしていただきました。

郷土の民話と伝説　第２話　「キツネの迷い道」＝麻生区片平＝

昔、片平から岡上に行くには、現在の遺跡公園のある平和台に出て「五郎坂」を下りて町田市鶴川の能ケ谷に出ました。そして、さらに鶴見川を渡ると岡上でした。この道は、２メートル半くらいで周りには木々が繁りとても淋しい感じのするところでした。

ある時、岡上から片平に嫁いだ奥さんが実家からの帰り道、能が谷の乾物屋でたくさんのお土産を買い、肩に背負って家路につきました。

もうすぐご主人のもとに帰れると奥さんは気分もわくわくしながら急ぎ足で家に向かいました。　能ケ谷から片平へ向かう林道にさしかかった時、もうずいぶんと歩いた気がしましたが、一向に自分の家の方に近づいていないのです。それでも奥さんは必死になって歩きました。何となく背中の荷物が軽くなったようでようでありましたが特に気にもしないでひたすら歩きましたが、ふと気が付いたら、幾度も幾度も同じ道を回っているではありませんか。奥さんは急に怖くなり、さらに歩幅を広くして走るようにして家路を急ぎましたがまたしても同じ場所を回っているではありませんか。やっとのことで家にたどり着き、家の人にそれを告げたら『キツネに化かされたんだ』と言われ、さらに荷物を調べてみたら乾物屋で買ったものはほとんどなくなっていたそうです。皆さんは今までこんな体験がありませんでしたか？　（参考資料：「川崎物語集」）

柿生郷土史料館開館のご案内

開館時間

開館：午前１０時
閉館：午後　３時

開館日

セミナAB	２月　６日(日)	ガイドAB	３月　６日(日)
セミナAB	２月１３日(日)	ガイドA	３月１３日(日)
セミナAB	２月２０日(日)	セミナAB	３月２０日(日)
	２月２７日(日)		３月２７日(日)

※ セミナAB→ガイドセミナーを午前と午後の部実施　ガイドA→全体ガイドを午前の部実施

４月以降の開館予定は「柿生文化」33号（3月18日発行予定）でお知らせ

◉**展示物ガイド**　説明員による館内全体の展示物のガイドを行ないます

◉**展示物ガイドセミナー**　特定の展示物について講座形式で詳しく説明します

①テーマ「豊臣秀吉御禁制朱印状と麻生」　2/6・13・20実施

②テーマ「体感、縄文時代 =触ってわかる縄文時代の生活=」3/20実施

実施時間　A(午前)１１；００～１２：００　B(午後)１３：００～１４：００

カルチャーセミナー案内

第２７回 柿生 **カルチャーセミナー** ご案内

日時　３月１５日（火）午後６時より

会場　柿生中学校　視聴覚室

テーマ（仮題）「発見された相模川橋脚から分かる歴史的事実」

―― 稲毛三郎が妻を悼み建造 ――

―― 源頼朝の死の「謎」を考える ――

講師　大村　浩司　氏

（茅ケ崎市教育委員会社会教育課文化財保護担当）

内容　鎌倉初期に造られた「橋」にまつわる事件を探求する。

カルチャーセミナー案内

第２８回 柿生 **カルチャーセミナー** ご案内

日　時　５月に予定

会　場　柿生中学校　柿生郷土史料館

テーマ

「佐藤英行画伯の絵で見る柿生・岡上の百年」

＝パネルディスカッション＝

内容　佐藤画伯の郷土を描いた絵画をもとに語る古き故郷の姿

※詳細は次号でお知らせします。